

ホトラヤマ聞き書き

— 棕川での取り組みから —

朽木 FS 特任研究員 島上 宗子

はじめに

朽木フィールドステーション（朽木 FS）では、「火と水のエネルギーを活かした『くらしの森』づくり」を目指してきた。火のエネルギーを活かした取り組みには、滋賀県の湖西地方（朽木・棕川）におけるホトラヤマの復元と、主に湖北地方（余呉）における焼畑実践がある。本稿では、棕川におけるホトラヤマ復元、とくにホトラヤマに関する聞き書きの活動を中心にこれまでの活動を振り返ってみたい。

ホトラヤマとはあまり聞き馴染みのない言葉である。滋賀県湖西の山間の村々では、かつて、田の肥しにするための草木（コナラの萌芽や茅、草など）をホトラと呼び、ホトラを刈り取る山のことをホトラヤマと呼んでいた。春の火入れ後、萌芽して腰丈あまりに成長したホトラを 8 月に刈り取り、翌春、田の肥しとする。毎年、火を入れることで、集落のまわりには草山状態に保たれたホトラヤマが広範囲に広がっていた。山の有機物が田んぼを養う。ホトラヤマは暮らしに不可欠な山だった。しかし、1960 年前後にはホトラヤマ慣行は行われなくなり、かつてのホトラヤマは、今では杉の植林地になったり、ナラ林に様変わりしている。

私がホトラヤマという言葉を知ったのは、今北哲也さんを通じてである。滋賀県大津市に生まれ、1974 年、朽木の針畑に移り住んで以来、雑木山の恵みを活かした生業づくりと暮らしのあり方を模索してきた今北さんは、過去 20 年あまり、ホトラヤマの復元を意識した取り組みをはじめていた。とはいえ、今北さん自身、山焼きやホトラ刈りを体験として知っているわけではない。造林学と風景計画を学ぶ学生だった今北さんが朽木村をはじめて訪ねたのが 1970 年。その頃すでにホトラヤマ慣行は途絶えていた。しかし、その名残はここかしこにみられ、人工林でも雑木山でもなく、背丈ほどに伸びた柴や草が広がる、かつてのホトラヤマの姿に今北さんは驚いたという。スギの造林が次々と進められていた当時、ホトラヤマは、山と人の関わりを「くらし」という視点から考え、実践するという今北さんの原点の一つとなったといえるのかもしれない。

朽木 FS 事業は、こうした今北さんの問題意識とこれまでの実践を軸に、メンバーそれぞれの関心、問題意識、実践が重なりあい、絡み合うように展開してきた。メンバーはそれぞれ専門も経歴も地域と関わるスタンスも異なるが、「火と水のエネルギーを活かした『くらしの森』づくり」という夢、ビジョンは共有していたと思う。私自身は、インドネシアでの調査と実践の延長線上に朽木 FS の取り組みがあった。今から振り返ると、次の三点をめぐる問題意識に突き動かされていたように思う。

第一に、「土地を所有しているか、していないか」、「農地か、森林か」、「利用・開発か、保全・保護か」の二者択一を前提とする法制度や政策に対する疑問である。私が調査と実践で関わりをもつインドネシアでは、森林、土地、自然保護に関わる法制度は基本的にこの二元論の上に成り立ち、あらゆ

る政策を規定していた。日本で造林政策が推し進められていた当時、ホトラヤマの存在に驚き、以来、「くらしの森」づくりをめざす今北さんの実践は、こうした二元論的見方に対する強烈なアンチテーゼであるように思えた。最近では、里山、コモンズ、半自然（加藤 2006）、半栽培（宮内 2009）という視点から、こうした二元論ではつかめない実態や価値があることが注目されるようになった。私はなんらかの実践を通じて、それにアプローチしてみたいと考えた。

第二に、インドネシアと日本の地域がもつ課題や可能性は共通しているのではないか、という気付きである。といっても、インドネシアと日本で学術的な比較研究をすれば、課題解決に向けた有益な知見が得られる、と考えたわけではない。それよりも、インドネシアと日本の地域が今直面している課題は根本部分で共通し、その意味で、それは「彼ら」の課題ではなく、「私の」課題でもあると気づいた、ということである。やや感覚的な表現となるが、インドネシアで取り組んできた研究や実践がようやく自分の「根」とつながった、インドネシアにしる、日本にしる、地域により「主体的に」関わられるように思い始めた、ということである。

そして、第三に、インドネシアにしる、日本にしる、「くらしの森」づくりが投げかける課題や取り組みに、日本の、都市に暮らす私はどう関わられるのか、という問いである。すぐに答えがでる問いではないが、朽木 FS 事業を通して、同様の問題意識や迷いをもつ人たちと実践しながら考えてみたいと思ったのだ。

4 年間の朽木 FS 事業は、朽木や椋川でのホトラヤマ復元に向けた取り組み、余呉での焼畑実践、水車を軸に水のエネルギーを活かす実験など多岐にわたった。「火と水のエネルギーを活かした『くらしの森』づくり」は、長く実践されてきた地域の知恵や慣行（ローテク）に学びながら、新しい技術や研究成果（ハイテク）も適宜活かし、外部者も関わりあいながら、現代版の「くらしの森」をつくりだそうという構想である。地域の知恵や経験に学び、「地域の主体性」を重視する立場をとるが、構想自体は、私たち外部者が「外から」地域に持ちこむアイディアであり、山野への火入れや水車設置などの「実験」を入り口とした「実践」である。地元の方々にアイディアが受け入れられなければ、実験にも実践にも至れない。こうした地域との関わりのあり方については、メンバーの間で幾度となく議論となった。結果として、朽木 FS の取り組みは、実験・実践地を求めて、朽木、椋川から余呉へと広がっていった。

本報告では、そうした中で取り組んだ、椋川でのホトラヤマ復元、とくにホトラヤマをめぐる聞き書きを取り上げたい。聞き書き自体は、朽木 FS 事業と並行して私が関わった日本財団 API リージョナル・プロジェクトの一環として取り組んだものである。両者とも地域に関わり、地域の現場で人と自然の関わりを学ぶという点では共通している。本稿では、過去数年間の椋川との関わりを振り返りつつ、とくにホトラヤマに関する聞き書きから見えてきたことを報告したい。聞き書きを単に情報を得るための手段と捉えるのではなく、聞き手と話し手のやりとりからなる実践と捉え、その意義を考えてみたい。

1. 椋川との関わり、椋川での取り組み

1.1 はじまり

2005 年の冬、井上四郎太夫さんのお宅を訪ねたのが、私にとって椋川との出会いだったと思う。2003 年頃から、私は、日本の村に息づいてきた共有資源の共同管理の仕組みである「入会（いりあい）」についてもっと知りたいと考え、日本の山村を訪ね歩いていた。調査を通して直面するインドネシア

の山村の問題状況と、入会をめぐる日本の経験が重なり合うように思えたからだ。2004 年からは、インドネシアと日本の山村間で経験交流と共同調査を促す試み（以下、「いりあい交流」）を進めつつあった（島上 2007）。日本の山の村について知りたいなら、会ってみたらよいと紹介されたのが今北さんで、朽木の針畑にときどきお邪魔するようになっていた。

椋川を訪ねたのは、ホトラヤマ復元の可能性を四郎太夫さんに打診するためだった。当時私は、今北さんや黒田末壽さんらとともに、朽木・針畑の女性たちから、ホトラヤマの経験を聞く活動をはじめていた。山野への火入れに関心を持つ人たちが少しずつ集まりはじめ、後にこの集まりを「火野山ひろば」と呼ぶようになった。大学休学中に針畑で山村暮らしを体験し、2001 年から椋川に移り住んでいた是永宙さんもその一人だった。滋賀県立大学の野間直彦さんも、獣害対策における草地の役割といった視点から、ホトラヤマに関心を寄せ、私たちは時折集まっていた。こうした人のつながりが、朽木 FS の活動へとつながり、椋川は FS の活動拠点の一つとなった。

1.2 椋川という里

椋川は琵琶湖の北西、福井県との県境に近い山間の村である。村といっても行政単位としての村ではなく、合併が繰り返された今は、県内で最も面積の広い高島市の一地区にあたる。近世から明治の初めにかけては「椋川村」が存在していたようだが、1889 年（明治 22 年）には近隣の村々と合併して三谷村となり、1950 年には今津町、さらに 2005 年には、隣接する朽木村などとともに高島市となった。

滋賀県内の川のほとんどが琵琶湖へと注ぐのに対し、椋川を流れる寒風川は北へと向かい、北川に合流して小浜市で日本海へと注ぐ。文化的にも福井県若狭とのつながりが濃い地域である。

道沿いに並ぶ家々やその周りに広がる田畑を除いて、椋川の面積の 9 割以上を山林が占める。2011 年末現在、人口は 56 人、28 世帯。このうち 65 歳以上の人口が全体の 62.5%を占める。かつては県下でも指折りの炭焼き生産地で、人口が 400 人を越えた時期もあったが、炭焼き産業の衰退とともに椋川の外に仕事を求める人が増え、人口も減少していった（表 1）。

尾篠（おじょう）、下篠（しもんじょ）、中山（なかやま）、明良谷（あからだに）、堂前、崎原（さ



図 1：椋川の位置

出典：[是永 2011] ⁴⁾ を加筆修正

表 1 椋川の人口と耕地面積の推移

年	戸数	人口	耕作面積 (町歩)	森林面積 (町歩)
1880	69	343	57	512
1919	75	415		
1924	68	393		
1932	60	358	60.6	512.8
1960	(1930 年代と大きな変化はなし)			
2009	31	62	17	
2011	28	56	17	

出典：(黒田 2007) に加筆。

注：原資料は、1880 年は滋賀県物産誌、1919、1924、1932 年は三谷村経済更生計画、2009 年は黒田聞き取り、2011 年は島上聞き取りである。

きはら)、乾谷(いぬいだに)、上自在坊(かみじざいぼう)、下自在坊(しもじざいぼう)、小原谷(おはらだに)など、かつて存在した集落(字)のうち、上自在坊、下自在坊、小原谷の3集落は1960年代に廃村となった。道沿いに並ぶ家々も、数軒に1軒は空き家であることが多い。高齢の一人暮らし世帯も多く、子供、孫、曾孫の世代は、今津町などの近隣の市町村や、京都や東京などの都市に暮らす。アメリカなど海外に暮らしている世帯もある。

椋川の生業の柱はかつて、炭焼きと米づくりだった。山で炭を焼き、田んぼの肥しとなるホトラを刈った。田んぼの面積は、今では17町歩までに減少したが、1960年代頃までは60町歩ほどあったという(表1)。毎年、田んぼ一反あたり400束のホトラが必要だったとの記録にもとづけば、一年に椋川全体で24万束のホトラを集める必要があったことになる(黒田 2007)。山によって、よいホトラがたくさんとれるところと、そうでないところがあったようで、当時のホトラヤマの面積ははっきりとはしないが、図2から判断しても、100町歩あまりはあったのではないかと推計される。図2は、明治時代の地形図(明治26年測量、明治28年発行)から草山状態の山を識別して色をつけたものである。椋川の方々の話の中でも、色づけられた箇所あたりがホトラヤマだったとの話が出てくるので、大きなズレはないのではないかとと思われる。

日本の山村の多くがそうであるように、椋川でも1960年代を境に暮らしのあり方が大きく変わっていった。薪や炭にかわって石油が主要な燃料となり、田んぼでは牛に代わり耕運機、ホトラ肥にかわり化学肥料が使われるようになった。椋川的主要産業だった炭焼きは衰退し、村を離れる人が増え、耕作面積も急速に減っていった。ホトラヤマや遊休田にはスギの植林が目立つようになった。過疎化、高齢化がさらに進む中、椋川でも耕作放棄せざるをえなくなった田が増え始めた。

こうした中、椋川では集落をあげての取り組みがなされてきた。1979年には、地区再編農業構造事業の補助を受けてライスセンターが建設され、集落営農が開始された。先進的な取り組みとして当時、注目を集めたという。2000年には耕作放棄地の解消と担い手育成を目的として、農業生産法人「椋川農産」が設立された。耕作放棄地を借り上げ、集落の人や近隣に移住してきた若者などをオペレーターとして時給制で雇用し、米を生産販売している。2011年現在、15名から土地を借り上げ、17haの農地を管理している。

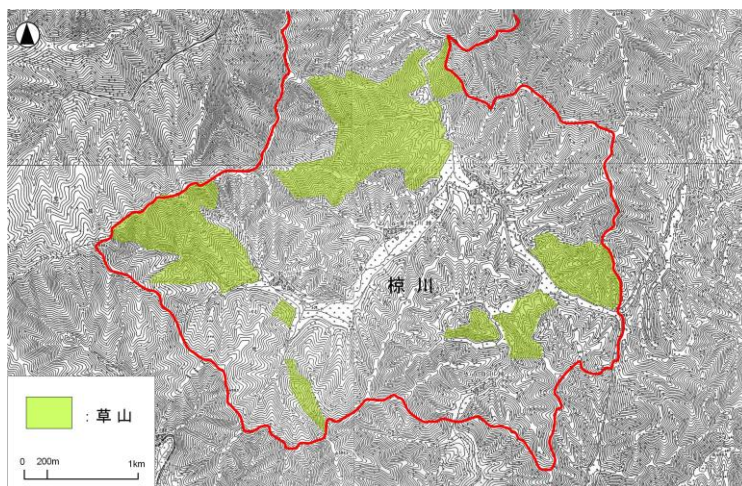


図2：草山の拡がり

〔作図〕 増田和也
出典：(朽木フィールドステーション 2009)



写真1 各家の手作りの品々が並ぶ「おっきん！椋川」収穫祭(写真撮影：島上、2010年)

椋川のよさをもっと外に発信したい、と是永さんがはじめた「おっきん！椋川」収穫祭は、2011年
 で8回目を迎えた。「おっきん！椋川」は毎年11月に開かれる交流イベントで、椋川の産物や家庭
 の手作り品などが軒先に並び、周辺市町村や京都、大阪、東京などから人々が訪れている（写真1）。
 2011年には400名あまりが訪れたという。この他に、年間をつうじて様々な体験企画（味噌づくり、
 豆腐づくり、藁細工、しめ縄づくり、生きもの観察会、雪かきや村普請への参加、など）が実施され
 ている。是永さんが開設するホームページ「椋川の里」（<http://mukugawa.korekore.org/>）やブログ「あれこれ椋川」（<http://mukugawanosato.blogspot.com/>）、フェイスブックには、こうしたイベント案内の他、
 椋川に暮らす中での発見や想いが綴られている。

A photograph of a traditional Japanese building with a steep, thatched roof. The building has a dark wooden frame and a large, multi-paned sliding door. A stone wall with a small path leads up to the entrance. The surrounding area is lush with greenery, including trees and flowering plants.

年 4 月、高島市の都市農村交流拠点施設「おっきん椋川交流館」として生まれ変わった（写真 2）。この改修に向けた取り組みがきっかけとなり、2008 年には、「結いの里・椋川」が組織された。「結いの里・椋川」は、井上四郎太夫さんを会長、是永さんを事務局として、椋川に暮らす全世帯から成る組織である。改修に関わった人々をはじめ、外の人々も加わっている。椋川に暮らす人々が主体となりながら、外ともつながり、協力しあう、現代的な「結い」をめざした組織だといえる。現在、おっきん椋川交流館を維持管理しているほか、様々な体験企画を「結いの里・椋川」として実施している。改修に向けた議論が進む中、是永さんが発信したメールにその意図や想いが凝縮されているように思う。

朽木 FS の活動は、棕川でこうした取り組みが動きだしつつある中、進んでいった。

1.3 棕川との関わり、棕川での取り組み

(1) ホトラヤマ復元の試み：火野山ひろばと朽木 FS 事業

2005 年冬の棕川訪問を前後する頃から、山野への火入れに関心を持つメンバーは、棕川でホトラヤマ復元をめざした活動を少しずつ試みはじめていた。黒田さんは四郎太夫さんの指導の下、棕川で子牛を調教しはじめた。後述のように、ホトラは牛の敷き草とされて熟成し、よい肥しとなる。黒田さんは、ホトラヤマ復元とともに牛耕も復活させようとしていた。四郎太夫さんは、私たちのホトラヤマ復元の意図——火を入れることで多様な山の姿を取り戻し、山に「賑わい」を取り戻すことが多様な生業づくりにもつながるということ

——に理解をしめしてくださっていた。しかし、元ホトラヤマだった山は個人所有化と杉の植林がすすみ、火が入れられるような候補地はなかなかみつからなかった。山に火を入れるのがむずかしそうなら、休耕田に火を入れてみようとの是永さんの提案で、休耕田での焼畑も試みた。

そうした中、棕川の元小学校裏の谷間を林道残土で埋め立てた斜面で、火入れを試みるという話が持ち上がった。カヤなどが繁りはじめた斜面で、火入れの様子は、里山に関する NHK の映像ドキュメンタリーの一部として撮影されることとなった。わずかなカヤではとても火入れは難しいことから、琵琶湖のヨシなどを燃え草として搬入した。ホトラヤマの火入れを体験している四郎太夫さんと久太郎さんに、是永さん、今北さん、黒田さんが加わる形で、2007 年 4 月 12 日、棕川の斜面に火が入れられた（写真 3）。

普通の山野であれば、火入れ跡にはワラビが芽吹き、カヤなどが繁茂しはじめたかもしれない。しかし、林道残土からなる斜面であったためか、ワラビはもとより、カヤもなかなか繁ってはこなかった。芽生え始めたカヤをシカに食べられてしまったことも原因し、火入れ跡の斜面はカヤもまばらな裸地となった。

そうした中ではじまったのが、朽木 FS 事業である。当初、朽木 FS では、ナラ枯れなどの問題を抱えたナラ林（元ホトラヤマ）に火を入れる形でホトラヤマ復元をめざした。しかし、

実験候補地はなかなかみつからない状況で、裸地状態となったこの斜面が候補地として浮上した。カヤを植え、さらにコナラを植え、カヤダイラおよびホトラヤマを一から「造成」していく案である。2008 年年末、朽木の奥からカヤを掘り起こし、林道残土の斜面への移植がはじまった（今北 2009）。春、雪が解けるとすぐ、ヒノキの間伐材の焼き杭を支柱にしたシカ除けネットを設置し、さらにカヤ株を植えた（写真 4）。石でゴロゴロの林道残土の斜面は固いため、重機で穴を掘り、土壤改良のためのチップ堆肥を施しながらの作業である（島上 2009）。カヤを移植し、獣害防止の柵で斜面を囲う。40 年前には想像もできない光景かもしれない。シカがネットのわずかな隙間から入り込み、カヤの若



写真 3 棕川で試みられた火入れ
（写真撮影：黒田末壽、2007 年 4 月 12 日）



写真 4 林道残土の斜面にカヤを移植
（写真撮影：今北哲也、2009 年）

芽を食べてしまったこともあったが、カヤは概ね株を張っていった。

ホトラヤマの「造成」をめざし、コナラも植えることになった。是永さんが中心となって 2008 年秋に拾ったドングリから苗木を育て、シカに食べられないようネットで囲いながら育てたが、カラスに空からやられる結果となった(増田 2009)。6 月には、小雨降る中、周辺の雑木林からナラの実生を集めてフラワーポットに移植も試みた(写真 5)。根を傷めてしまうのか、活着はかんばしくなかった。2009 年の秋には、是永さんが、ECC 学園高校の生徒さんの環境教育の一環として再びドングリ拾いを実施し、苗木づくりを進めた(是永 2010)。しかし、これも寒さやカラスにやられ、うまくは育たなかった。

2010 年度以降、朽木 FS の活動は、余呉での焼畑作業にメンバーの時間が割かれることが多くなり、椋川でのホトラヤマ復元にむけた取り組みはペースダウンしている。しかし、苗木はまだ僅かの本数だが、カヤは繁りは始めている(写真 6)。シカを防ぐという課題は続くが、2012 年春にはカヤに火を入れられるほどに株が張ってきた。

(2) ホトラヤマと入会

火野山ひろば・朽木 FS のメンバーとして、カヤダイラやホトラヤマ復元の試みに参加する一方で、私は東南アジアとの交流という形でも椋川におじゃまするようになっていた。そのうちの 하나가、前述の「いりあい交流」である。椋川でも山の多くはかつて、村の人々が共有する入会の山だった。明治に入り、官民有区分事業が実施された際に、入会地は一旦官有地となったが、ほどなく地元払い下げられた(澤田 2010: 74)。椋川では 1884 年(明治 17 年)に、その払い下げ地を「割山(わけやま)」と各世帯に分け、個人所有とするという取り決めが村でなされた。四郎太夫さん宅には、そのときの取り決めを記した「別山台帳」の複製が保管されている。小原谷と自在坊をのぞく 49 世帯全員によるとりきめで、小原谷と自在坊ではそれぞれ別途、同様に割山された(写真 7)。

割山の対象となったのは、奥山と原野(ホトラヤマ)である。割山された、つまり各世帯の個人所有となった後も、ホトラヤマの利用をめぐる



写真 5 コナラの実生を集め、フラワーポットに移植(写真撮影: 増田和也、2009 年 6 月)



写真 6 柵を施して約半年後の 2009 年秋、林道残土の斜面にもカヤが繁り始めた(写真撮影: 黒田末壽)

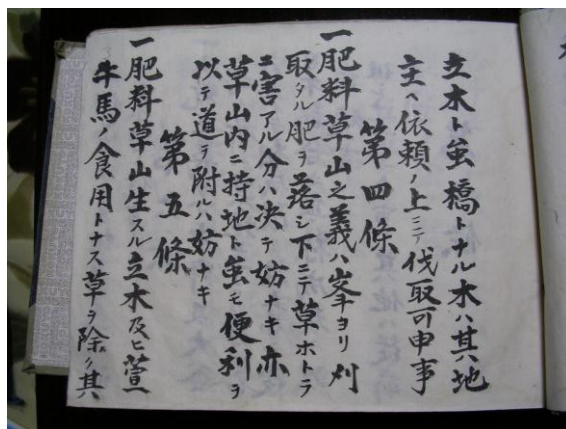


写真 7 井上四郎太夫さん宅に保管されている「別山台帳」(写真撮影: 島上)

守らなければならない取り決めがあることが割山台帳には記載されている。たとえば、個人所有地であったとしても、他者がその便のために道をつくってもよい（第四条）、立木や萱や牛馬の食用とする草以外のものであれば、どんなものでも相互に立ち入って採取してもよい（第五条）、などである¹。村では、自分の所有地からといって好き勝手はできない。つまり、ムラでは絶対的な所有権が貫徹しない。鳥越らが日本の村の土地所有観の特徴の一つとして指摘する「土地所有の二重性」がみられるといえるだろう（鳥越 2007:47-64）。インドネシアの村にも同様の感覚がある（島上 2007: 50-53）。



写真 8 中スラウェシからの人々とともに
（写真撮影：島上）

2006 年 9 月には、1 泊 2 日と短期間ではあったが、インドネシアの中スラウェシから来日した 5 名の人々とともに椋川を訪ね、交流した。5 人中 2 人は、焼畑を主な生業とする村人である。村の母語、国の共通語であるインドネシア語、そして日本語と、幾重もの通訳がしばしば必要となったが、自然を活かして暮らす経験や感覚は共通していると実感される場面がいくつかあった。一つは上記の「土地所有の二重性」ともいうべき感覚であり、その他にも、家の建て方、薪の割り方、案山子の様子、山の中の祠の様子など、私が予想もしていなかった暮らしの細部に、スラウェシからの人々は関心を示した（写真 8）。

村に暮らしてきた人同士の交流には、「経験してきた者同士の共振」¹⁴といえるような、言葉の壁をこえた共通の回路があるように感じられた。こうした交流に、研究や調査では得られない、ある種の手ごたえのようなものを感じながらも、この短い訪問・交流がそれぞれの地域の人たちに何をもたらしたのか、地域の将来にどんな意味があるのか、整理のつかない思いは残った。そうした中、関わることになったもう一つの交流活動が、日本財団 API リージョナル・プロジェクトである。

（3）田んぼを借りる：日本財団 API リージョナル・プロジェクト

API リージョナル・プロジェクトは、アジア 5 カ国（インドネシア、日本、マレーシア、タイ、フィリピン）の研究者、実践家、アーティストなどが各国を相互に訪問し、分野や専門を越えて協働することをめざし、2008 年 11 月から 3 年間実施された。活動の母体となったのは、日本財団の API フェロシップ助成をこれまでに受けたフェローたちである。日本では、琵琶湖、特に針畑と椋川が主たる活動サイトとなった。2009 年 9 月には、上記 5 カ国から 30 名あまりのフェローが琵琶湖に集い、2 週間、コミュニティに根ざした



写真 9 お借りした田んぼで田植えの準備
（写真撮影：島上）

¹ 「第四條 一 肥料草山之義ハ峰ヨリ刈取タル肥ヲ落シ下ニテ草ホトラニ害アル分ハ決テ妨ナキ亦 草山内ニ持地ト（雖）モ便利ヲ以テ道ヲ附ルハ妨ナキ」「第五條 一 肥料草山生スル立木及ヒ萱牛馬ノ食用トナス草ヲ除ク其他何品ニアラス相互ニ立入候トモ不苦シ候事」

人と自然の関わりについて学びあった。

3 年間という限られた期間に、いかにフェロー間で協働し、地域の人々と関係をつくり、地域の現場で何ができるのか。手探りで準備が始まる中、椋川では田んぼ借り、自分たちで米づくりをしてみようという計画がもちあがった。「椋川で田んぼを借りてみませんか。その過程で村の人たちと仲良くなっていきませんか」という是永さんの提案がきっかけだった。

二畝ほどの小さな田んぼをお借りして、できるかぎり昔ながらの方法で米づくりをしてみることになった。3 月の種まきに始まり、9 月の収穫にいたるまで、毎週のように椋川へと通った（写真 9）。作業に精一杯で、村の人に出会うことなく戻ることもあった。それでも、田んぼを借りて通っているということ自体が、村の人々と私たちの距離を縮めてくれたように感じられた。

「ああ、あそこで田んぼやってはる人らやな」「昔のやり方で、えらいこっちゃなあ」「なかなかうまいこと、やってはるで」「若い人の声が村で聞こえてくるのはええもんやなあ」など。

かつては「こんにちは。おじゃましています」程度で終わっていた挨拶が、立ち話になり、時には土手に座っておしゃべりにもなった。村の方々の名前や顔が徐々に馴染みのあるものとなり、暮らしと人生の断片が少しずつ見えてきた。私たちも「あそこで田んぼやってはる人ら」として少しずつ顔を覚えてもらえるようになった。

田んぼ作業は、API リージョナル・プロジェクトを進めていく基盤となっただけではなく、私自身にとっても、「ホトラヤマ復元」「いりあい交流」「API」といった目的や枠組みをはずし、島上宗子として椋川の人々と向き合う契機となっていった。

3. ホトラヤマ聞き書き——経験を記録すること

API の田んぼ作業は、椋川の人々が経験してきた変化を、実感をもって理解、想像する契機ともなった。二畝あまりの小さな田んぼでさえ、こなし、ならし、草を抜く作業に、私たちはへとへとになった。4 人で作業をしてたつぷり 2 日かかった「こなし」と「ならし」の作業が、トラクターをつかえば十数分で終わるとするのは衝撃だった。機械や化石燃料の威力を改めて実感する一方で、それがまさに、ホトラヤマ慣行を途絶えさせた一因でもあることに複雑な思いを抱いた。四郎太夫さんは私たちにしばしば「椋川の心を伝えたい」と話された。炭焼き、木の伐りだし、機織り、牛耕、ホトラヤマ慣行など、椋川に長く受け継がれてきた作業や仕事の数々を、年配者の経験と記憶の中に残っているうちに、記録しておきたい、と話された。四郎太夫さんが「心」という形で表現しようとしていたのは、何か抽象的な言葉で伝えられる教えや道徳ではなく、日常の当たり前の作業や仕事に埋め込まれるように受け継がれてきた、自然や物事や他者に対する見方、対し方であるように思えた。

API では、三年間の活動記録として、写真図録集を作成することになった。そこに、田んぼとホトラヤマを中心として、かつての暮らしの一端を描いた絵と文章を盛りこみたいと考えた。四郎太夫さんのいう「椋川の心」を少しでも記録できないだろうか、と考えたのだ。

2010 年の冬から春にかけて数回にわたって、田んぼづくりを通じて顔なじみになった女性たち 5～6 名の方々に集まっていただき、話を伺った。皆さんほぼ同世代で、昭和 10 年（1935 年）前後に生まれ、昭和 30 年（1955 年）前後に椋川で結婚し、今も椋川に暮らす女性たちである。

すでに見ることができないもの、体験したことがないことを聞き取るのは、想像以上にむずかしい作業だった。録音なんかしたらはずかしわ、と言われながらも、録音させてもらい、一言一句メモに書き起こしていった。書き起こしていく中で、パズルがかみあうように、暮らしをめぐる一つ一つが

繋がっていく感覚をもった。かつてホトラヤマ慣行が生きていた時代は、山から刈り取るホトラ、ウマヤの牛、火入れ後に芽吹く山菜、一筆一筆が小さい田んぼ、一年の味噌がまかなえるほどよく採れた畦マメ、稲木掛けされる稲、山菜を採りにいく藁の袋、など、一つ一つがうまく連関しあって暮らしがなりたっていたことが垣間見えてきた。

どこにどの程度のホトラヤマがあったのか、毎年どの程度刈りとったのか、など、数量的な情報もお聞きした。そうした情報の一つ一つは、しんどかったこと、うれしかったことなど、豊かな思い出とともに語られた。それをできるかぎりそのまま書きとめることにした。そこに暮らしの中の思いや棕川の心ともいえるものが表現されていると思ったからだ。その一部を引用しつつ、ホトラヤマを軸とした一年のサイクルを概観しておこう。

① ホトラヤマの火入れ

4月22日頃から下旬にかけての一日、村中のホトラヤマに一斉に火が入れられた。棕川ではその年に刈らないところにも毎年火が入れられた。集落総出の作業だった。世帯が所有する山が数か所ある場合は、それぞれの山に世帯から誰か出なければならなかった。男も女もでた。朝8時頃から家を出て、午前中に火を入れ、お昼頃には一段落した。火は上（尾根側）から入れたが、ある程度下がったら、下からも入れた。1人がつけると3〜4人は杉葉などで叩いて消していった。火に煽られ、消すほうが大変だったという。女性は火を消す役割を担うことが多かった。火が燃え広がらないよう、前年の秋（9月15日頃）には、火入れをする周囲を2〜3メートル刈っておいた（ダケガリ／ヤキギリ）。

「毎年全部共同で焼いたわ。村中総出や。一軒の家でも、嫁さんやったり、親父さんやったり、別々のとこにいかんならん。持ち山あるやろ。一カ所とは限らんやろ。東のほうへ行かんらん場合もあれば、西のほうにいかんならん場合もあるんや。一斉に火つけるさけな。おんなじ日に。その時分には、今日は風はないわと思て、火つけると風がでてきて、燃えてならんところに火がはいってなあ。帰ってきてご飯たべとっと、どっからの山燃えとると、走ったことあったなあ」

「[アラタン（荒谷）の山焼きには] 15、16人ほどおったやろな。そこに持ち山がある人。最初尾根のほう焼いていくんや。反対側のほうに入っていかんように。ほんで、下っていくんや。大体火をいれる場所は決まってる。ずっと両方に分かれて下っていったな。ある程度下がっていったら、下から入れる。反対側に入らんように消していかんらんや。」

「1人がつけたら、3、4人は消していくんや。足で踏むなり、杉の葉を皆手に持って、叩くんや」

「[火をつけるのは] 誰でもよかったんやで。若いもんはつけたがるんや。火つけるほうが楽なんやで。後で消すほうが火に煽られるやろ。熱いのなんので、顔の肌一枚剥げるくらいやったで。谷風で逆風するやろ、そうすると、みんな火が顔のほうにかかってくるんやで。それが危なかったな」

「前の年の秋にな、ダケガリゆうてな、防火線をつくっとくんや。9月の15日頃やな。2〜3メートルほど、ぐるりをみんなで刈って歩くんな」

「そりや、皆仲間やさけ、どこの山に火がはいっても消しに行く。ご飯食べさしでも走っていったがな。山の上やさけ、水あれへんし、あれはえなかったな」

② ホトラヤマと山菜

春の火入れの後、まもなくすると、ホトラヤマにはワラビなどの山菜が一斉に芽吹いた。ホトラヤマの多くにスギが植林され、獣害が深刻化した今では、すっかり姿を消してしまった山菜は、夢にみるほど懐かしい記憶として語られる。

「ワラビ、ゼンマイ、ウド。ウドって、これくらい白い、白根がでた山ウド。オオタンの山や。今はもう植林してもたさけ、あかんけど。植林するまで、ものすご、あったんや。山を焼いた後にニョキニョキでたな」

「ホトラヤマあがったときにマツタケ出てたな。松の木があったから。大当たりや。」
「ゼンマイでもな、これくらいごっついゼンマイがしゅーっとでとる。夢見るはいまでも。今はかけらもないわな」

「山菜、当たり前やったさけ、なんとも思わなかったけど、今は懐かしいな。今は全然あかん。毎年出んと、絶えてしまう」

③ ホトラ刈り

夏の土用にはいるとホトラ刈り、カリボシ刈りをした。ホトラとカリボシは「同じもんや」という人もいれば、山焼きの後、乾かすか否か、牛の敷き草にするか否か、などの違いで言葉を使い分ける人もいた。暑い盛りのホトラ／カリボシ刈りは、個々の世帯が一家総出での作業だった。地形により、束ねて上から転がす場所もあれば、背負っておりる場所もあった。盂蘭盆の頃まで毎日続く辛い作業だった。ホトラ刈りの際には、コンナシと呼ばれる仕事着を着た。白いコンナシに藍の刺子入りの帯を結び、鉢巻をして作業する男たちは「それはかっこよかった」という。コンナシは春に畑に植えた麻から繊維をとりだし、秋に糸に撚り、冬に女性たちが織って作るのが常だった。

「夏の土用にはいると、ホトラ刈りしたんや。8月の1日頃からやな」

「ホトラは女も男も刈りにいったの。一週間ほど乾かすと、ものすごく軽くなるんや。カリボシ刈りにいって、負うて、8月14日の晩は盆踊りで朝まで踊って、また、カリボシ刈りに行ったんや。若い時はごっつかったんやな。鎌は稲刈りの鎌のちょっと大きいくらいのやつやな」

「(刈って束ねたカリボシは) 私らでも8つくらい負うたな。荷物にするのん、むずかしいな。嵩が高て。よっぽど上手に荷物をこさえんかぎり、途中でひっくり返ってしまう。」

大体腰丈くらいが一番よかったな。それより短いとやりにくい。短いところ、繋いでしたな。横に繋ぎあわせて、真ん中で縄を縛るんや。それを3つくらい積んだな。背中で背負うんやで。背中までを一つの塊にして、その上に3つか4つ載せるんや。頭よか、高なった。人、見えへんわな。歩いてたら。カリボシ歩いてるみたいなもんや。前からでもうつむいとるさけ、人は見えへんで」

「今日はええ天気や、カリボシとる日やゆうたら、そりや、村中のもんがカリボシとる行くやろ。カリボシ負いで賑やかなもんや、道で。行くもんやら、帰ってくるもんやら。狭い狭い道やで。二人と歩けん道や。出会っても行かれんわ。負うてる人に道譲ったわな」

「負うのもかなわんけんど、刈るのに蜂の巣あるのんも嫌やったわ。刈る小口にな、草の根っこに蜂の巣あつてな。早うからわかればええけんど、鎌で刈ったときに、うっかりしとっと、チクーっと刺されるやろ。あれがかなわんかったわ。盆やちゅうのに、蜂に刺されたらな。若い時は。盆踊り行かれへんやろ。あれが一番かなわんかったわ」

「[ホトラ刈りの時は] 麻で織ったコンナシ、着てた。白い、白の布。涼しかったな。女の人も白いのん着て。アカゴンナシていうて、柿渋したやつも着たな。痛かったな。首がはげたな。古いもんはええ。新しいのんが痛い。コンナシ着て柱にもたれると、柱がはげるわ！、て叱られたな。あろてあろてすると、柔らかくなる。重たかったの。そやけんど、涼しかった」

④ ホトラ肥

夏の土用に刈ったホトラ／カリボシは、ホトラ／カリボシ小屋に積み上げた。牛のいる家は、牛の足元に敷いた。一週間に一度ほど肥出しをして、新しいホトラと入れ替えた。牛の糞と混じったホトラ肥は、山にして積んでおいた。ホトラ小屋の空いた場所に保管することもあった。春になり、田の準備ができると、ホトラ肥を素足で踏み込んだ。

「刈った草は束ねて持って帰ってきて、牛のおる家は牛の足元で踏まして、そしてまた肥出してゆうて[厩から出して] つんどくのやわ。ホトラと一緒に混ぜ合わせて積むとまろやかになる、ちゅうてた。牛のおらんうちは、田の縁に積んでおいとくとちょっと柔らこうなるさけ、春の田んぼのできあがったときに均して、田んぼにいれたなあ」

「カリボシ小屋って家の裏にあったで。六畳から八畳くらい。びしーっと屋根裏までいれる。この天井（約3メートル）くらいあったな。もっと高かったかもしれんな。嵩おおいさけ。たくさん積んでいくと、ぺちゅーっと板のようになるわ」

「カリボシ小屋からだして、徐々に徐々に厩にいれて、牛に踏まして。毎日ということはないけど、汚れてくると敷いてやるんや。そして、田んぼにいれて。一カ月に一回くらいは肥だしたな」

「均した田んぼの中に散らして、鍬を上にしてこうして足で踏んで、中に入れ込むの。今みたいに田靴あれへんし、裸足やで。足の先で、元のほうを踏みこめよ、ってよういわれた。これくらいの長さやな。切らんと、束ねたやつを田んぼにぼんぼんって。素足で踏んで、鍬で均して」

「田んぼの大きさによって、ここの田んぼには何束くらいいるって、目安ができた。そやからそれによって、つんでな、発酵させておくんやけん。生のやつね」

「昔は今みたいに金肥あらへんしな。肥がたらんとな、笹山行って、笹刈って、それを足で踏んで。私が笹刈っていれてくれたさけ、ようできた、っておとつつあん、喜んでくれたわ。青草いれるとようできるちゅうて。何にも履かんと足で踏んで。あれも束ねたな。よう怪我せなんだなあ」



図 3: ホトラヤマと田んぼの一年

〔聞き書き・イラスト〕岩井友子

出典：(API リージョナル・プロジェクト JAPAN ワーキング・グループ 2011: 45-46)

聞き取った内容は、文字だけではなく、絵の形で表したいと考え、イラストレーターの岩井友子さんに協力を依頼した。岩井さんは限られた時間で、聞いては描き、描いては聞き、再度描きなおすというプロセスを根気よく続けてくれた。そして聞き取った暮らしの断片と季節の流れを一枚のイラストで表現した（図 3）。四郎太夫さんは、ホトラの積み方、ウマヤの位置、畦草の活用など、細かいところまで、コメントをくださった。炭焼き小屋、麻を蒸す桶、種粃を水につける池、苗代など加えたかったが、十分聞ききれず、描きこめなかったものも多い。いずれにせよ、身近にあるものを無駄なく丁寧に使いこなす。そしてそれが循環を生み出し、山と暮らしに賑わいを創りだす。かつての「くらしの森」とはそういうものではなかったかと思う。

おわりに

朽木 FS がめざした「火と水のエネルギーを活かした『くらしの森』づくり」は、椋川では、カヤダイラとホトラヤマ復元を糸口にすすめようと試みた。火入れを通じたホトラヤマの復元はかなわず、林道残土の斜面にカヤとコナラを移植し、シカ除けネットを設置しながら、一から「造成」を試みる事となった。FS 事業の後半は、カヤの成長を待つ、ゆっくりとしたペースとなったが、期間終了後も続けていく予定である。

朽木 FS と並行して取り組んだ API リージョナル・プロジェクトでは、椋川に田んぼを借り、毎週のように通うとともに、ホトラヤマと田んぼを軸にかつての暮らしの一面を聞き書きしていった。それは、私の「くらしの森」に対するイメージをより具体的で豊かなものにしてくれたように思う。

「くらしの森」づくりは、ホトラヤマが存在した昔の暮らしに戻ることを目指しているわけではない。長く実践されてきた地域の知恵や慣行、身近にあるものを丁寧に活かす工夫や心に学びながら、新しい技術や研究成果を活かし、外部者も関わりあいながら、現代的な形で再構築しようとするものである。その意味で、栗田邸の改修をきっかけに、マチの人々と交流、協働しながら、現代的な「結い」の再生をめざす「結いの里・椋川」の取り組みに学ぶべき点は多いといえる。これからの「くらしの森」づくりや「結い」の再生には、「地域の主体性」を尊重しながら、マチに暮らす人間も「主体的」に関わっていくあり方をみつけだす必要があるだろう。朽木 FS のメンバーの地域への関わり方にさまざまな違いがみられたように、誰にでも当てはまる正解があるわけではない。これからも実践しながら考えていきたい。

謝辞

調査と実践にあつては、井上四郎太夫さん、是永宙さんをはじめとする、椋川の方々に大変お世話になりました。記して感謝申し上げます。本稿の記述に間違いなどがありましたら、筆者の責任です。今後も椋川に通い、地域の方々に学びながら、理解を深めていきたいと思っています。

参考文献

- API リージョナル・プロジェクト JAPAN ワーキング・グループ編 2011『琵琶湖 山里の暮らしに学ぶ』
今北哲也 2007「海の向こうに焼畑の村を訪ねて」いりあい・よりあい・まなびあいネットワーク『経験をつなぐ：日本とインドネシア「いりあい交流」2年間の記録 2004.11-2006.10』：90
今北哲也 2009『「くらしの森」の一步：火入れの前に』『ざいちのち』No. 4：2
加藤真 2006「原野の自然と風光：日本列島の自然草原と半自然草原」『エコソフィア』18号、昭和堂 4・11
朽木フィールドステーション 2009「暮らしとつながる山の姿：映像資料からたどる景観の変遷」『京都大学総合博物館 学術映像博 2009 企画展示』
黒田末壽 2007「火と牛が作った風景：高島市椋川のホトラ山」『人間文化』（滋賀県立大学紀要）vol. 21：12-18.
是永宙 2010「どんぐり苗“奮戦”記—椋川から—」『ざいちのち』No.16：2
是永宙 2011「地域の人とともに歩むまちづくり」2011年度 JICA 研修「住民主体のコミュニティ開発」講義資料
澤田純二 2010『区誌 椋川—資料が語る山里の暮らし—』サンライズ出版
島上宗子 2007『「いりあい交流」がつなぐ日本とインドネシア：山村の知恵と経験に学ぶ』加藤剛編『国境を越えた村おこし：日本と東南アジアをつなぐ』NTT 出版：31-61
島上宗子 2009「朽木 FS、春の便り」『ざいちのち』No. 7：2
鳥越皓之 1997『環境社会学の理論と実践』有斐閣：47-64
増田和也 2009「カヤダイラ復元の道程」『ざいちのち』No. 9：3
宮内泰介編 2009『半栽培の環境社会学：これからの人と自然』昭和堂